

# 天神山記

(一名天神山落城記)

## 解題

天神山記 一卷 著者 藤 雲

此書、二別本あり。或は天神山記と云ひ、或は天神山實録と云ひ、或は天神山落城記といふ。即ち、その表題は之を異にするも、内容は全く大同小異なりとす。今回刊行の書は天神山記を取り、落城記との異同は、これを欄外に掲げて参照に供することゝせり。而して此書の成りしは、天明七年三月なるも、承應の頃これに關する記録のありしことは、此書の序文に『在昔承應の頃の記録の一卷を持傳へしを祖として、實録を記すもの也』とあるにてこれを知るべし。

著者全水山人藤一雲といへる人、その事蹟を詳にせず。その記す所を見るに、浦上宗景を推稱して、武勇猛威の大將と稱し、宇喜多・明石・延原を逆臣と罵り、獅子身中の蟲と嘲けるが如きは、思ふに、浦上氏の遺臣にして、時世を憤慨せるの餘、この書を著はせしものゝ如し。殊に、天神山家臣の氏名を列舉し、○印△印を以て、忠邪の別を立てたるが如き、以て著者の志の存せる所を見るに足る。

此書、初に浦上氏の家系を記し、次に宗景が天神山入城の次第を記し、直家の奸計より天神山落城の事に及ぶ。浦上・宇喜多兩家記、中國太平記、陰德太平記の記事に比して、最も委曲を盡せるは、蓋著者が浦上氏と密接の關係ありしによるならんか。中にも、下山氏に關する事蹟の如きは、伯耆大山下山神社縁起と相俟つて、下山神社の由來を知るべき希有の史料たるべし。

# 天神山記（一名天神山落城記）

## 序

臣として君を弑し、主家の國を押領し、一度威をふるふ事ありといへども、子孫長く榮ゆる者なし。天理を失ふ大本成る故、天地のにくみ是より甚しきはなし。されば浦上宗景こそ武勇猛威の大將なれども、宇喜多・明石・延原が如き逆臣の爲に亡ぶる事あり。誠に獅子身中の虫といふべき也。その事跡正しきといへ共、世隔たりぬれば由來舊跡徒らになり行き、名のみ知る人稀ならんと、後代の事思ひ替られ甚だなげかしく、在昔承應の頃の記録の一卷を持傳へしを祖として、實録を記すもの也。

天明七年丁未三月下旬

（以上、原本に天神山記とせるもの、序文）

備前和氣郡田土村に天神山あり。西より南は大河にて、さらに寄るべきやうもなし。北は山かさなりて要害最能の地也。臣として君を害し主家の國を押領し、一度威をふるふものありといへ共、天道に背く故に子孫永く榮ふるものあらず。天地の憎是より大なるはあらず。人として君臣父子夫婦兄弟朋友の道なくんば、禽獸に不<sub>レ</sub>異れば、浦上宗景こそ武勇猛威の大將なれども、宇喜多・明石・延原が如き、逆臣の爲に亡ぶることあり。實に獅子身中の虫といふべき臣なり。その事跡正しきといへども、世へだよりぬれば、來由舊跡もいたづらになりゆき、名のみも知る人稀ならんと思ふまゝに、往古承應の頃記録一卷を祖として、聊か其事實を記すのみ。

全水山人

藤

一

雲

（以上、原本天神山落城記とせるもの、序）

# 天神山記 (一名天神山落城記)

著者 不詳

## 城主浦上宗景由緒并天神山入城之事 附片上葛坂軍之事

\*一、爰に東備和氣の郡新田の庄云々(落)  
\*二、本州備前三石云々(落)

\*三、別本落城記には後遠江守と改むと割註あり

\*、是又早速同意す。猶又見積りの爲一味の輩密に地利を見立(落)

備前國和氣郡新田の庄田土村天神山の城主たる、浦上遠江守宗景の初まりを尋ぬるに、往昔人皇六十二代村上天皇第七の皇子具平親王の御苗裔、赤松播磨守則景十世の後胤、浦上掃部介村宗と云ふ勇士<sup>\*二</sup>、本州三石に居城す<sup>住</sup>。此時播備作の三ヶ國は、播州赤松左京大夫晴政の幕下たり。村宗武威に募り、主人赤松が下知にも不<sup>レ</sup>隨。晴政甚是を憤りおもふ折から、享祿元年三好と細川確執に及び、赤松は三好に一味し、浦上は細川に隨ひ主從隔りぬ。晴政・村宗<sup>内イ</sup>大物の邊にて卒す。村宗が墓は和氣郡伊里村<sup>伊里村イ</sup>の内、山田原といふ所に有之。嫡男は浦上太郎政宗、次男は與次郎宗景とて、兄弟父の跡を繼ぎ同じく武威をふるひける。晴政の長子上總介政村、未だ若年なれ共父の恨を受繼ぎ、同國赤松采女正と心を合せ、兵を率し浦上と戦ふ。終に赤松利を失ひ、一族家臣悉く討死し、白旗の城落城せり。是より政宗兄弟武威に募り、播州室に城郭を構へ、同國山下の城備前片上戸田松<sup>土イ</sup>を端城に構へ、一門の面々發向し、其威隣國を併吞せんとしける。兄政宗の息二人あり。嫡男を與四郎政範・次男を豊松丸といふ。城中の繁昌<sup>賑ひイ</sup>比類なし。宗景殿思召やう。我兄に養はれ何の益なく光陰を送る事口惜き次第也。所詮何方へなりとも參らんと思ふ故、自然と兄弟不和に成り、家老大田原與惣<sup>三イ</sup>左衛門實時・日笠治郎兵衛頼房・岡本次郎左衛門龍實は隔心なき者故、内談有りける所早速同心す。彌我儘發氣し何方へや赴かんと密談區々の所、備前國田土村天神山は三石より近境故<sup>近境イ</sup>、嶮岨の高山にて要害無双の城地たる事兼々能存じ、天神山と一決して、夫より日笠・大田原の兩士より、明石大和・同姓飛驒共の方へ相談に及びける處、兩人も早速此儀に同意す。猶又見積りの爲め一味の輩、しのびく<sup>レ</sup>に地形を見定めて、天文二年辰四月九日夜、密々室城を忍出て給ふ。供士の輩には、當城の長臣大田原與惣<sup>三イ</sup>左衛門・服部主膳・日笠治郎兵衛・

<sup>三</sup>、崩し取り家中の家にせよとの上意也  
<sup>落</sup>  
<sup>三</sup>、明けわたして家中の云々  
<sup>落</sup>  
<sup>四</sup>、自ら浦上遠江守と號し、備州を押領せんと其勢ひ猛虎の如し  
<sup>落</sup>

<sup>五</sup>、成可申とな某云々  
<sup>落</sup>

<sup>一</sup>、押切て被仰けり  
<sup>落</sup>

<sup>二</sup>、委細語りければ云々  
<sup>落</sup>

同苗彈正・後藤河内・宇喜多左京・岡本次郎左衛門等を先として、隨ふ侍下部迄百人計にて、天神山の近郷日笠村御着あり。先達て日笠・大田原が裁許にて城郭普請最中故、同所に御止宿被<sup>レ</sup>成、近郷の民屋を崩<sup>レ</sup>し取<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>申條被<sup>レ</sup>仰ければ、諸人おもふ様、宗景公一城の主とも成り給はゞ、銘々忠勤いたし置かば、追て一廉の恩賞にも可<sup>レ</sup>預と思ひ、若違背に及ばゞ國司の威光後日の咎めを恐れ、銘々住宅を崩し天神山へ持運ぶも有り、又勝手よき場所は其儘家中の屋敷と成りしも多し。右の通故早速荒増に出來して天神山へ入城あり。浦上遠江守と號し、備作兩國を押領すべき其威猛虎にひとしく、作州三星山の城主後藤安成・同國下山清氏等を初として、其外備作の諸侍皆太守と敬ひける。此度忠勤盡す輩へは、夫々恩賞を褒美の沙汰有り。遠近の庄屋莊官器量ある者共は、譜代に被<sup>レ</sup>召抱一皆々祿を給りしと也。扱又播州室の城主浦上近江守政宗殿は、御舍弟宗景殿近衆の輩大勢にて出城致されしゆゑ、行衛御聞合有ける處、天神山へ趣き籠城の用意有<sup>レ</sup>之事早速に御聞被<sup>レ</sup>成、御立腹不<sup>レ</sup>斜、早く大軍を指向けべきの所、家老の各申様、御憤り御尤ながら今少し御延引被<sup>レ</sup>成、彼城要害見合の爲一應使者を以て御呼返し、宗景卿の御所存も承届、我儘に相究らば其上にて御合戰可<sup>レ</sup>然と申ければ、政宗暫く御工夫有て、成程實否も不<sup>レ</sup>糺軍勢を遣すは無骨とも比興とも成べし。先使を遣はし否やの返答可<sup>レ</sup>承と、當家の舊臣西尾定右衛門使を蒙り、天神山へ來り宗景公の御前に通り、西尾臆せる色なく、先以此間は不<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>御意<sup>二</sup>御勇健の尊顔奉<sup>レ</sup>見恐悅奉<sup>レ</sup>存候。隨て頃日當地へ御越被<sup>レ</sup>成候儀御慰の爲め大和方に御逗留と存候處、天神山に籠城と取沙汰、政宗卿御立腹不<sup>レ</sup>少、早速御歸城可<sup>レ</sup>然候。若左も無<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>候はゞ騷動の基とも成り可<sup>レ</sup>申候。某御迎のため參上せり。御歸城被<sup>レ</sup>下候はゞ、國家の爲め一家中のよろこび、某迄難<sup>レ</sup>有奉<sup>レ</sup>存候と頻りに進め申ける。遠江守殿委細御聞被<sup>レ</sup>成御返答被<sup>レ</sup>仰けるは、某當地へ趣く事慰め遊興にあらず。兼て其方も知る通り、兄弟不和に及びたる上は所詮一國一郡をも領する所存也。又兄政宗武邊の憤りにて軍勢を指向らるゝ條尤の事也。夫とてもすべきやうなき仕合、某再び室城へ歸る事相成がたく、其方遠路の使者大義千萬、暫く休息歸國の上其旨可<sup>レ</sup>申達こと手切の様に御答被<sup>レ</sup>仰ける。西尾詮方なく室城へ歸り右の一件具に言上し、天神山の要害見及候まゝ、宗景の存念家中の心底委敷申上たる處、近江守殿益御立腹堪へがたく、此上は片時

三、以下の一句  
落城記之を缺く。

も早く彼地へ馳向ひ、家來の奴原踏殺し、宗景が首を土産にせんと、既に用意を催さる。去程に宗景殿は、舎兄政宗立腹の餘り近日馳向ふよし聞及ばれ、俄城の事なれば軍兵に事を闕かれ、備作の諸士へ廻文を以て人馬の催促頻り也。近郷の武士庄屋庄官、或は腕立強敵の者共、又遠國の諸浪人等櫛のはを挽く如く馳集り、擬又作州三星山の城主後藤安成・同茶喰の城主下山清氏、其外の諸士より加勢の軍勢追々相集る。然る所益原村大樹山の僧ども、并本庄の郷侍森中務・同九郎左衛門・恒次新左衛門・同藤内等をも、ひたすら味方に御頼み有りければ共、中々天神山へ不隨に仍て、遠江守殿甚立腹あり。是によつて追討致されける。去程に室勢片上戸田松城へ進發の由相聞えければ、宗景軍大將には明石飛驒・宇喜多左京・延原彈正・日笠・香中・池・高原・額田・菅崎・岡本・橋本・久永・奥山・芦田等也。作州加勢の大將には、後藤安近・安藤大次郎・瀧川又吉等也。惣勢都合五千餘騎、天文二年七月下旬天神山を進發し、片上葛坂の邊、伊部鯛山の方へ出張して魚鱗鶴翼に備へ、旗馬印等數百流朝の嵐に吹靡かし、夜は猛火天をこがし、さも凄まじく見えたりける。斯くて二十日計り相戦ふといへども、元來連枝の事也、相從ふ武士は乍敵主人也。又立向ふ兵も竹馬の傍輩故、自然と進みがたく、終にはれやかなる勝負もなく、一先和睦して室城と天神山へ相引に曳にける。其後戦ひ止にけり。

### 宇喜多下山由緒之事 附天神山家中之姓名

爰に浦上宗景の家老に、宇喜多左京直家と云ふ者有り。先祖を尋ねるに、人皇七十五代崇徳院の御宇大治二年の春とかや。百濟國王の姫宮王子を懐胎し、聊の事有りとて何國ともなく流され給ふ。當國兒島に着船し琴を弾じおはしける故、島人いたはり參らせ、此趣を帝都へ奏聞し奉りければ、則都へ召上せられ禁庭にて御評定の上、三條中將殿の妻女に遣されしが、程なく男子を平産あり。名を三條宇喜多少將と申す也。則兒島を給はる。男子三人有り。東郷太郎・加茂次郎・西郷二郎と云ふ。是皆浮田・三宅の元祖也。都て宇喜多は、二字浮田三字宗喜多これ同姓なり。



三天山山落城  
記には市村左  
近入る

一、去程に宇喜  
多左京直家は  
宗景に取立ら  
れ高知を領し  
威勢廣大に成  
ゆき愈心を發  
す。何卒して  
浦上家を亡し  
播備作三ヶ國  
を押領せんと  
奸曲を巡らし  
（落）  
二、殊に城廓堅  
固にして要害  
も好ければ中  
々容易く責落  
し難く空しく  
光陰を送りし  
處（落）

△浦上將監景行 ○明石大和景之 家老逆臣の長たりイ ○明石飛驒景親 ○宇喜多左京直家 逆臣の長たりイ ○明石三郎左衛門景季 秀一 △日笠治郎左衛門頼房  
△日笠彈正頼恒 △大田原與惣左衛門實時 與三左衛門イ 大田原與三郎 △服部主膳 ○延原彈正 △日笠利左衛門 岡本豊前龍  
家 ○同苗五郎左衛門龍晴 時イ 額田與次兵衛 額田與次右衛門 ○池土佐 同苗主殿 △後藤河内久之 △高原六郎  
下山半内正氏 政イ △林九郎兵衛 菅崎兵左衛門 奥山源六 ○橋本四郎左衛門 右イ 久永三郎兵衛 後藤數馬 香中  
頼宮 芦田 難波 小堀 福田 青山 石田 丸尾 西田 岩井 岡田 近藤 田中 木村 此等の人々不知一族  
多く當城にぞくす。

右の外家中の武士數多有りといへども、時世はるか隔りたる事ゆゑ委しくしれず。

### 直家謀計を廻す事附江見河原主人を討事

永祿五年正月月中旬、浦上近江守政宗の嫡男與四郎殿の御内室に、印南郡五着の城主黒田官兵衛孝高殿の息女を御  
引請、則御婚禮有ける處、其刻龍野下野守内々政宗父子に意趣有けるが、祝言の折からを能き時節と思ひ、不意に押  
寄せ夜討に入り散々に責戦ふ。室城には思ひもよらず、數多の侍防ぎ兼る。下野守は兼ての存念六具を堅め、家來に  
兵具を用意させ、無二無三に切込み／＼責惱す。室の兵ども大半討たれ、政宗與四郎親子の人々終に討死致されけ  
る。室城既に危き所、次男清宗相續しける。去程に宇喜多直家は宗景に厚恩を受け、高知を領し威勢廣大に成り行き  
何卒して浦上家を亡し、自身備播作を押領したくと恐敷く愈心發氣しける。度々天神山へ登城し城中の様子、又は  
家中の心底をも餘所々しく窺見るに、明石飛驒延原彈正等は智謀拔群なる者なれば、直家の胸中をも推察し内々  
味方に加り、三人共心を合せ猶又様子を伺へども、家中の面々忠義一途の者多く、殊更城郭堅固なればすべきやう  
なく、とかく光陰を送りける。其頃元龜二年十月中旬、直家天神山へ登城し、明石日笠を初め諸士を伴ひ、宗景公の  
御前に参り品々評定有ける中、太守仰けるは、扱も先年軍已後は室城と不和相募り、日頃承れば清宗諸浪人を集め、  
當城を覆す評議致すよし、江見河原源五郎内々申越し、片時も不<sub>レ</sub>安事也。近日此方より押寄せ可<sub>レ</sub>踏落<sub>二</sub>の間、其旨

\*三、未實合も不  
相知申二何様  
御糺の上二應も  
可然と言上  
し(落)

\*一、兄與四郎殿  
に妻取りたる  
後室清宗殿に  
めあはせ(落)

\*二、前かど清宗  
より宗景を亡  
さん爲軍略催  
促ある杯と跡  
方もなき事を  
宗景に言入れ  
し事見河原  
宇喜多の輩奸  
謀を以て事を  
起し其騒動に  
乗じて事を計  
り浦上兩家を  
亡さんと工み  
しこと恐しき  
次第なり

\*一、別度以絶  
一段疎遠の至  
に候此度以趣  
使者中入趣  
意甚嚴密の事  
故更不置紙上  
候偏に厚頼  
上無事成就の  
於有之者、  
一簾所領可  
宛行者也(落)

心得可申と被仰ける。明石・宇喜多・延原等は御答も猶豫し居ける處、日笠・大田原の兩士言葉を揃へ、仰の旨一々御尤に存候へども、未實否も再應も様子御糺の上、一戰被遊可然候。若其内に室勢御當城へ押來り候共、何程の事かあらん。此義は暫く御延引可然と言上す。宇喜多・延原・明石等は、兼ての所存ある事なれば、兩人が言葉を押返し、成程其義も去る事なれども、先年も刃を争ひ其後彌確執を結び、殊更右の仕合故何時も不<sub>レ</sub>知大軍責來り、貴殿達の軍配にて暫く防戰可成哉、元より軍は銘々粉骨を盡さねば勝利なし。臆病神の采配には諸軍もすまます。鐵炮矢叫の音は耳に毒成物と様々悪口しける。日笠大田原も言掛り、言葉も募り口論しける。浦上將監景行後藤河内久元さま<sub>（やうい）</sub>制し止む。宗景卿も一旦被<sub>レ</sub>仰し事ながら、家中の面々心中區々と思召、其儀は免も角も、今日は黄昏にも及ければ、皆々休足致し申すべしと御意に隨ひ各退出す。其夜直家明石延原談合、翌日また登城し、宗景卿へ密に言上する事暫時也。其後御暇申し退きける。何事か申上げ、ん知る者更になかりけり。扱も室の城主浦上近江守政宗父子不意の横死に仍て、次男豊松清宗相續し、則與四郎殿後室を娶合せ、清宗未だ若年成る故、家臣江見河原源五郎を執權として國政おだやかに治りける。元來強慾邪智の者にして兼々謀叛の志有り。宇喜多左京と心を合せ望天神を責落し、備播作を掌に握る所存にて、前廉清宗より宗景を亡す軍評定有る事也。跡方もなき虚説皆兩人が謀計なり。頃は元龜二年霜月上旬、直家忍で源五郎宅へ至り案内しける。源五郎立出見れば左京也。急ぎ伴ひ奥に請じ色々響應<sub>（もてな）</sub>ける。直家申様、兼て閑談申通り、先日御内通にて宗景大概立腹あり。既に發亂あるべきの處、日笠大田原中々不<sub>レ</sub>同心、故思ふに任せず。今日參るは殿の御使者也。則御狀も到來せりと取出す。源五郎受取開き見るに、其文に曰、

\*三  
一別已來は絶<sub>二</sub>音信<sub>一</sub>、疎遠の至に候。此度其方相頼度子細有<sub>レ</sub>之。依<sub>レ</sub>之態々使者指遣候。其趣意は甚嚴密の事故、更に不<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>紙上<sub>一</sub>候。偏に厚く頼入候事。成就の上此方へ參着においては、一簾所領可<sub>二</sub>宛行<sub>一</sub>候。猶又委細の儀は、左京より以<sub>二</sub>口達<sub>一</sub>可<sub>二</sub>申述<sub>一</sub>候也。

十一月六日

遺上字イ  
宗 景 判



\*一、家中の輩内々意(中)を合時(中)盛人の宗景(中)容易にも敵(中)がたく(中)折(中)残念に思(中)味方(中)は天神(中)さん(中)と(中)落(中)

\*一、夫より室城へ使者を遣し久松丸殿を呼寄せ其臣は不殘せ其城へぞ集めける。又天神山に初延原明石を初め宇喜多方へ屬したる事夢にも不知、高が直家如き恐る、當城の鍵先に踏落さんと云々(落)

浦上遠江守宗景は、威勢に誇り諸寺諸山を焼亡し、上を恐れざる我儘非道の政度々也。家老共度々諫言仕るといへ共、用ひ不<sub>レ</sub>申。我々後日の咎を恐れ御注進仕候と言送る。元來浦上家は秀吉公に憎まれければ、直家が願聞届けられ宗景に隠居致させ可<sub>レ</sub>然と被<sub>レ</sub>仰聞<sub>一</sub>ける。花房は急ぎ歸國し、主人直家に秀吉の趣意を述べければ、直家悦び、夫より使者を以て浦上久松丸へ申遣す様は、宗景公は正敷貴公の爲には伯父なれども、御親父清宗の敵也。某身不<sub>レ</sub>肖ながら御味方致し、宗景を亡し申べし。如何思召やと申遣ければ、久松丸行年九歳、未<sub>レ</sub>幼少なれば何の辨もなく、家中の輩内々意趣を合居る事なれば、是究竟の時節と早速同心し、發亂に及候て軍勢指向可<sub>レ</sub>申と返答すれば、直家大に悦び、此上は計略を以て天神城を落さんと、一人の娘を兼て惣領浦上與次郎殿へ宮仕へ致させ置けるが、何の心なき體にもてなし己が居城へ招待し、暫逗留の間毒酒を用ひ、既に御病氣大切にて天神城へ御歸館。天正五年五月六日御卒去被<sub>レ</sub>成。御壽二十九歳也。杉澤長福寺引導にて同十一日御葬送。則河本村に御墓有<sub>レ</sub>之。誠に若木の花をちらし、武勇絶倫の宗景公も御殘心不<sub>レ</sub>少。是より佛法御歸依有り。今更大樹山焼亡の事ども御後悔の御顔色見え給ひければ、當城の一家中も自然と猛氣衰へける。去程に、宇喜多直家は威勢増長の餘り謀計頻りにして悉く仕負せ、此時本望を達せんと密に味方を集めける。遠近の諸浪人器量有る輩多く馳集る。又天神山の諸士も累代恩賞の武士は數無くして、過半集る勢の事なれば、強慾にて祿を貪る者多く、其上宇喜多・延原・明石が如き譜代の長臣なども此體なれば、彼等が辯舌にたばかられ過半内々味方にぞくす。直家悦び宗景公に御隱居被<sub>レ</sub>成候へと申越ける。遠江守殿大に驚き給ひ、家老日笠彈正・同治郎兵衛・明石飛驒・大田原與三左衛門・服部主膳・岡本五郎左衛門等を初め、番頭物頭相集り、此上は片時も早く直家を退治可<sub>レ</sub>致と評議評定まぢく也。兼て彈正飛驒を初め過半宇喜多方なれば、軍評定の趣一々に沿の城中へ内々申遣しける。宇喜多天神山を攻落す手筈取々、思慮を廻らし居ける所、明石延原が方より件の趣内通しければ、此上は片時も延引成がたしと、尙又浦上久松丸へ使者を以て、定日を約し火急に用意を催しける。天神山には、明石を初め、其外の家中宇喜多方とは夢にもしらず、高の見えたる宇喜多が構へ一戦に及びなば、當城の許先にて只一時に踏落さんと、心易くおもひ居ける。頃は天正五年八月八日の、夜も既に丑の刻過る頃

三、別本稿、日笠を入る

三三方に續城峰なく實く希代如何程大軍を以て責むるとも落つべき便なし。とやせんかくやと寄手の兵共ためらふ處、城中に下知して云ふと免角寄手の變を伺ふべし云々(落)

成るが、人馬の足音凄まじく、如何成る者の業ならんと思ふ所に、宇喜多直家大軍を率し、父井國山に出張し、提燈松明夥しく暫時が間に白晝のごとし。すはや敵こそ寄せたるごと、俄に周章夥し。天神山には明石・延原・大田原・岡本・服部・額田・池・高原・香中を初として、諸士下部の輩迄驚き騒ぐ。其間に夜も明方に成りけり。敵の備を見れば、國山には宇喜多直家、其勢凡五六千騎堅菱の旗をひるがへし、北山には室の城主浦上久松丸より加勢の軍兵、是も同じく四五千餘騎、兩勢一萬餘の大軍天神山を挟み、鯨波の聲を揚る事數ケ度也。城中より明石飛驒父子・延原彈正・岡本五郎左衛門龍晴一番に切て出て大音上げ、如何に如何に直家慥に聞け、莫大の高恩を忘れ主君に向て弓引く事、天道を恐れざる振廻、夫のみならず不意を伺ひ夜討同前の合戦卓怯千萬、汝ごときの人畜生に敵たひ、物具を穢す事残念至極と呼はりしは、誠に無双の勇士とや皆々感心限なし。去程に兩勢言葉戦ひ暫くして、北山より大筒火矢を嚴敷搏掛け、矢さけびの音天地を響かし、隣郷の民屋には百萬の雷落掛るかと思れ、みなく／＼爰の谷彼所の岩間へ逃隠れしとなり。角て嚴敷取はさみ、もみ立てく責るといへ共、中々落べき城郭にあらず。西に一つの大河有り、高山嶮岨いふ計なし。岩角鐵を延べたるごとく、東一方を捕手にして其要害堅固也。三方は續く峯なく誠に奇代の名城なれば、敵いかほど大軍にても責落べき便なし。兎角籠城して寄手の變を伺ふべし。猥りに軍卒を責べからずと一騎も打て出す。また寄手も戦はんとせざれば、只陣取居る計り也。直家が指圖にて、明石延原が計略を待てる事也。天神山には夢にも知す何の苦もなく日暮しける。

### 天神山落城之事 附作州諸所軍之事

盛なる者は衰ふる事古今其例多し。爰に天神山の城主たる浦上遠江守源朝臣宗景公あり。昔天文の頃より當城を築き、備作二ヶ國の太守として其威廣大成りける處、此程宇喜多が亂に仍て軍旅を碎く。天神山は元より堅固に楯籠り、宇喜多勢室の勢は天神山を取りはさみ、火急に責落さんとはやると雖、責寄べき方便なし。はなやかなる軍も

なく其日も既に暮ければ、兩陣共に猛火天をこがし、物すさまじき有様也。天神山には猶更に、岩を渡る松の風とうとうとして物すごし。頃は八聲の鶴の時分俄に騒動する事有り。すはや夜討と思ひの外、當城の家老明石飛驒・同苗三郎右衛門・延原彈正・岡本五郎左衛門龍晴を初味方大半裏返り、城郭に放火して態とうろたへ騒動す。日笠二郎兵衛・大田原與三左衛門・服部主膳等諸勢に下知し、出火をしづめんと働けども、兼て當城の武士大半宇喜多方なれば其采配に隨はず、猶も所々に火を付て鯨波の聲を上げ散々に裏切す。後藤河内・同數馬・浦上將監・日笠治郎兵衛・同彈正・服部主膳・林九郎・高原六郎・菅崎兵左衛門・木村・久永・青山・芦田・香中の一族を先として其勢三百餘人、天神城を枕とし義を金石の重きにたとへ、命を敵の的にかけ大敵を不<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>疲、名を後代に残さんと火花を散して防戦す。誠蟻螂が斧九牛が一毛なりといへ共、忠義の太刀先するどくして敵多く討取りけれ共、寄手は大軍荒手<sub>新</sub>の武士入替りくもみ立て戦ふにぞ、元より無勢の城なれば詮方なく、其身金石ならざれば、深入して戦ひしが敵の首多く取り、皆々疲れて討死する。宗景今は詮方なく、太田原與三左衛門・後藤數馬・日笠の一族供して、八月十日夜の内に播磨方へ落給ふ。此時落書

ほのく<sub>ク</sub>と明石か今朝の裏きりに身を隠し行く宗景そうし<sub>キイ</sub>

口惜かりける次第也。忠義一途の勇士悉く忠死を遂ぐ。天正五年丙丑八月十日天神山落城。天文年中より纔に四十七年の在城也。宇喜多直家は幼少より厚恩を蒙り、武運に秀で父の敵を討けるも宗景の恩に非ずや。乍<sub>レ</sub>然前生積善の人が謀計天に不<sub>レ</sub>顯、悉く勝利を得、威にほこり勢猛虎にひとしく、明石彈正・同大和・岡本五郎左衛門・池土佐・橋本太郎を初として、天神山の侍多く宇喜多に隨ふといへ共、當國郷士赤坂郡由津里村住人難波三郎左衛門・同周匝の住佐<sub>々</sub>部勘之丞父子、並作州英田郡三星山の城主後藤左衛門少輔勝元・同國飯岡の住人保志賀藤内・井伏<sub>々</sub>矢櫃<sub>々</sub>の城主江見兵庫次郎・明見村の住下山半内正氏皿の荒神山花房五郎左衛門等、心を合せ中々不<sub>レ</sub>隨といふ。直家大に怒り戸川・岡・花房・長船・遠藤等を召集め、作州の諸士退治の手配、軍評定一決して、軍大將には延原彈正・遠藤喜三郎・花房・花枝・花田・花木・花岡・花村<sub>是を宇喜多の六</sub>此等を先として、其勢都合七千餘騎と着到して、進發の日限は、

\*伊吹矢櫃の城とあるは市場村矢櫃の誤なるべし尙矢櫃の城主は作州の城主は其他の古城跡其作州には岡本新三郎廣義とし江見兵庫倉山は高圓鎌倉山城とせり又血山の荒神とあるは種村荒神なるべし

一、保志賀藤内  
三星軍傳記に  
は星賀藤内兵  
衛基治に作る

三、土佐血氣の  
勇士なりしが  
帯刀は老武者  
なれども手練  
の強勇なる故  
に三時計の間  
目もふらず  
ひしはあし  
も今はあし  
ひかねて見え  
ける處、帯刀  
あやまつて木  
づきうつむけ  
づころびし處  
土佐ははしり  
寄て首討て退  
く云々(落)

天正七年四月五日と相定め、難波・佐々部を手初にせんと評定しける。直家討手を指向るよし粗傳開き、銘々要害しける處、難波三郎左衛門は、要害悪しく大軍を引請がたきに付、三星山へ一所に籠り、互に一所に心を合せ戦はんと城に火を掛け三星山へ立越ける。既に天正七年三月下旬、宇喜多大軍にて、周匝の住佐々部勘之丞が籠たる城を十重二十重に取巻き、鯨波の聲を上げにけり。兼て覺悟を極たる事なれば少も驚く體なく、花やかに出立て無二無三に戦ひしが、郎等散々に成り、其身金石にあらざれば佐々部父子終に討死しけり。彼山の一の谷と云ふ所に墓あり。作州飯岡鷺山の住保志賀藤内は、宇喜多勢の大軍を引請け利あらずとは思へども、一戦に不及逃んも口惜く思ひ、家老鰯矢又七・秋山十右衛門・大澤重郎左衛門など、心を合せ大敵に不恐戦ひしが、敵多く討取り終に討死。保志賀も詮方なく堅めの場所にて切腹しける。則二の丸に墓所有之。鰯矢・秋山・大澤が墓は鷺山の南麓に在り。英田郡倉敷の城主江見市之丞井伏矢櫃の城主江見次郎は、銘々城郭要害薄く、佐々部・保志賀が討負しに氣を吞れしか、兩士共海田村鷹巢の城へ引籠、諸卒を相具したむろしける。延原彈正押寄せ、急に取ひしがんと思へども、近邊に大木茂りたる深山なれば勢の多少も知れがたく、無骨に取懸ても如何成りとして、香谷邊の百姓を頼て東西より火を掛けさせ水の手を取切て揉立々々責動す。家老小坂田織部を初め郎等不殘討死す。江見の老臣清水帶刀、備前田土村の住人池土佐と戦ひしが、池は血氣盛の勇士、帶刀は老武者ゆゑ、池土佐討勝ち首を取て立果る處、清水が家來廣田七兵衛主人を討たれ無念に思ひ、此上は生て甲斐なしと、只一人跡より追掛け池土佐に渡り合ひ、火花を散して戦ひしが、心に土佐を切倒しける。折節彈正方の者皆引取り外に人もなかりしが、七兵衛は無難に土佐が首を取り、主人帶刀兩・八が首を其所に埋め首塚築置き、夫より三星山へも不行己が古郷播州三ヶ月の里へ歸りける。江見兄弟が墓は、卒都が崎と云ふ所に有之。

### 三星山落城之事 附 宇喜多戰功之事

去程に延原彈正が軍術にて、是迄數度の戰に勝利を得て其威猛狼の如く、近日三星へ責來る由聞えければ、後藤

\*寄手の者共是  
 彈正日和延原  
 らび海田村へ  
 押寄る處を率  
 三人手勢を率  
 荒木田より  
 抱掛の城へ  
 わきうに押寄  
 せ無二無三に  
 戦ひして弾正  
 此のてだてあ  
 りとは夢にも  
 不<sub>レ</sub>知防戦ふ  
 といへ共たま  
 りかねて延原  
 は佐々部村へ  
 げちる處右  
 三人の勇士追  
 掛々々戦ふ形  
 勢誠たる如く  
 荒れたる如く  
 也延原方四五  
 千騎ばかりな  
 りしが大半討  
 死す後藤河内  
 と延原渡り合  
 ひ秘術を盡し  
 下戦ひしが延  
 原は肩口を切  
 下げられ今は  
 あやうく見え  
 ける處云々  
 (巻)  
 \*下、誠は此者共  
 の働は古今無  
 双の勇士と皆  
 人々舌を巻て  
 ぞほめにけり  
 夫故に三星の  
 城一端勝軍に

左衛門勝元防戦の手配り致されける。先本丸には當城の家老後藤左近・水島久佐・山下六左衛門・山本彦右衛門・同  
 權内・福田左内等を初として都合三百餘騎也。東丸には安藤宗馬<sup>甲</sup>・柳澤太郎兵衛・難波利介其外已下二百餘騎、西丸  
 には駿河彈正・龍川<sup>門</sup>又一郎以下百五拾餘騎也、東丸と櫓には、天神山家臣後藤河内・浦上將監・下山半内・奥山源六・  
 小堀・青山・福田・芦田・丸尾・西田・石田隨ふ士都合二百騎人、南櫓には戸坂梶治<sup>六</sup>・岩井伊織、并備前難波三郎左衛門、  
 其外赤城・島田<sup>岩</sup>・江田・濱田等六十騎にて控へたり。總勢凡一千餘騎、甲の星をかゞやかし、誠に堅固に構へたり。頃  
 は天正七年四月上旬、延原彈正倉敷の向ひ鞍掛山に押寄せ、三星の城に對陣す。三星山の東丸を堅めたる後藤・浦上  
 等はを見て、敵は思の外大軍成るぞ、計略を以て取ひしがんと評議一決して、後藤河内久永・浦上將監景行・下山半  
 内正氏を大將にて二百餘騎、荒木田村の山陰に隠れける。寄手<sup>\*</sup>是をば夢にも知らず、延原彈正勢を分ちて海田村へ  
 押寄ける所に、彼の伏兵頗に起て荒木田より眞一文字に鞍掛山に押寄せ、短兵急に攻着けたり。延原が兵不意を討  
 れ、なにかは以てこらゆべき、右往左往に逃て行く。延原彈正踏止り士卒を下知して戦へども、亂れ立たる習にて耳  
 にも入れず逃退く。彈正是非なく佐瀬村へ引退く。跡より嚴敷追掛れば郎等返合ひく四五十騎討死す。後藤河内  
 眞先に進み、如何に彈正、主君に叛し敵に屬し國家を亡す極惡不忠、遁れぬ所覺悟せよと切掛る。彈正も聞ゆる手だ  
 れなれば、得たりかしこしと渡り合ひ、秘術を盡して戦しが忠義の太刀先するどくして、肩口をしたゝかに切下げ  
 られ、既に危く見えける處、遠藤喜三郎・花房藤内馳來り彈正を相隔てければ、其間に中間二人來り彈正を負ひて、  
 伊田の鳥與山迄逃延びたり。城兵彈正を追失ひ無念に思ひ、鞍掛の陣に火をかけて焼拂ふ。扱彈正方の兵共押寄せけ  
 る處に、柳澤<sup>杉</sup>太郎兵衛・難波利介・駿河彈正等を大將にて、三百餘騎教卷にして嚴敷攻戰ふ。寄手<sup>\*</sup>爰にても利を失ひ  
 田原へ掛渡る。延原が家來津田・吉田・岡田・小林等討死す。彈正方兒島三保<sup>三保介</sup>之助敵七八騎討取、高言して立たる所、  
 難波利介立向ひ手盡をして戦ひしが、冠板切落され太刀を捨て組合取結び、終に利介に討れけり。三星山より荒手  
 の勢二百騎相加りければ、寄手<sup>\*</sup>是に恐れ旗を巻き湯郷村へ逃去りける。此者共の働き誠に比類なき事夫々恩賞有け  
 ると也。去程に延原彈正は度々敗軍し、士卒も多く討るといへども、武功の者なれば少も是を苦ともせず、伊田鳥與<sup>伊田鳥與</sup>

成り宗景の思  
爰に報じ三星  
の城主へ忠義  
を盡せし事才  
に比類なき才  
士也(落)

三、人々驚き仰  
とも覺えず情  
なき御心かな  
例へ軍に利な  
く落城に及ぶ  
とも大軍を引  
受け花々敷討  
死せんこそ武  
士の面目たる  
べし。宗高如  
き一人なく  
とも合戦を止  
給ふ事後人の  
そしりも恥か  
しき事におは  
さずや急ぎ御  
用意有て一番  
宗高をふみこ  
ろし可。然と  
申り。夫よ  
り宗高が館に  
押懸攻戦ふに  
宗高も強力の  
兵、山下の兵  
と渡合ひ數刻  
戦ふといへど  
亡びたり。宗高  
も案ずるに愆  
といふものこ  
そ萬事の妨な  
り。宗高如き  
強勇の士、愆  
には眼もくら  
み、是迄に盡  
し、戦功も水

山に數日滯陣して、此山の記録を引て勝間と號し、寄城にして陣しけり。三星の城兵忠勤に仍て思の外手強く防戦す。延原彈正手疵を蒙りたる由直家聞傳へられ、猶又加勢として同苗治家に二千餘騎勢を添て取越されける。則勝間の城にて五六日軍評定有りける。其頃湯の郷村長光寺、彈正方へ訴へ申けるは、三星の城内に、安藤宗馬・柳澤太郎兵衛・難波利介と云ふ強敵あり。此等の三人斯く有る内は左右なく落城有間敷と、かの者共を味方に被<sub>レ</sub>成候はゞ、攻破の事易かるべしと申上げる。治家彈正長光寺を呼出し、右三人何卒味方に招き給らば恩賞望に任すべしと被<sub>レ</sub>申ければ、長光寺畏て領掌し、三星へ參り三人の武士に語りけるは、何卒延原方へ一味被<sub>レ</sub>下候はゞ知行望次第との事也。如何思召やと申入ける。難波・柳澤兩人は長光寺が言葉を空耳に聞き中々心變ぜず、宗馬は彈正方へ隨ふべき色見えける故、安藤宗馬反心致候由難波・柳澤兩人より城主後藤殿へ申上る。勝元大に驚き給ふ。水島久佐・後藤左近・山下六左衛門・駿河彈正等を召され、宗馬反心のよし。斯く譜代の家臣さへ二心有る位なれば迎も此城持がたし。及二合戦なば多くの家來我が爲に討死せん事不便也。某自害致すべしと仰せられける。人々驚き御自害を留め片時も宗馬を捨置がたしと各用意し、安藤が屋形へ押寄せ責戦ふ。宗馬は素より強力者にて水島・山下が勢に渡り合ひ數刻戦ひしが、難なく宗馬を討取ける。此虚に乗じて宇喜多勢三星城外に寄來り散々に責惱ます。難波・柳澤を初め多くの兵獲物を引提て防ぎ戦ふ所に、寄手の勢東丸に火を掛け、れば小屋場より東丸危し難波利介・山本權内荒木田村へ逃げ、れば、宇喜多勢追掛け山本已下討死し、難波は蓮花守にて討死す。寄手西丸に押寄せ、四月二十五日朝五ツ時より九ツ時まで攻戦ふ。駿河彈正・龍川又一郎其外多く戦死す。西丸櫓高壁焼落ける。宇根田太郎兵衛・山本彦右衛門一族二十騎計り討死す。太<sub>レ</sub>郎兵衛行<sub>年八十歳</sub>。宇喜多方の勇士數多引請討死す。城兵多く討れければ、勝元今は詮方なく郎等少々召連れ入田中山の方へ退き給ふ。寄手追駈け嚴敷戦ふ。漸切抜け長田村にて自害し給ふ。隠れ坂といふ所に御墓位牌之有。

皿の荒神山の城主花房五郎左衛門は宇喜多に降り和睦す。其外備作の諸士悉く直家が麾下に屬す。不隨者は椽所修理亮元常・金光次郎宗高其外多く攻め落す。終に和泉守に補任せられ、岡山に城郭を築き威勢廣大なりけるが、

の泡となり、不忠不義の名を遺すこと第一にあり。逆も討死せば、三ツ星の方にて大軍を引請け忠勤をあらはさば、末世勇士の名を留むべきに云々(落)

終に腫物の病に犯され、行年五十三歳にて天正九年巳九月に卒去。嫡子八郎殿は實父直家の家督を繼ぎ秀吉公の大老職にて、備前美作は云ふに及ばず備中國川邊川を切て、既に三ヶ國の主たり。加州大納言菅原利家卿の息女を、秀吉公の養女として秀家公に嫁娶す。仍て殿下の甥と號し豊臣の姓を給り、菊桐の紋蒙二勅許一從二位中納言に昇進し文祿元の頃朝鮮征伐の時は、都督將軍の號を蒙り高麗國に威を振ふる。然るに秀家家臣の諫を不用石田三成に組し、關ヶ原にて福島正則に攻崩され、宇喜多家永く斷絶す。浦上遠江守宗景は天神山落城の後播州へ赴き給へ共、宇喜多家威光強きゆゑ御足も留らず、夫より九州へ赴き、豊前國小倉の城主黒田勘解由次郎長政公の介抱にて、年齢かたむき慶長年中に卒去し給ふ。既に七八十年の盛衰爰に顯然たり。後代の武士此意をわすれず、慾心を退け我が家を戒め忠孝を勵むべきなり。

天神山并郷内の舊跡

本丸 二ノ丸 三ノ丸 長屋ノ段 辛堀 井落城跡の東西に南櫓跡有 百貫井 本丸の北手少下りて有り深し。今木

飛驒ノ丸 本丸の長に當り少し下 龜甲 山の姿、龜の甲に似た 水ノ手 天神山の北本丸の東久保山水の源なり。水

ノ段 天神山の東高山なり。時 人升 太鼓の段に並ぶ古 土佐屋敷 上田土村に在り。土佐屋敷といふ。火ノ見 上田土村

陣屋ノ鼻 田土北山の出鼻也。 鐵炮ノ段 北山の峰に有り。次は 轍尾 鐵炮段の南下播州勢籠 河本村 天神山若殿・浦上

岡本屋敷 河本村に在り。田土川 木村坂 天瀬村に有之。木 終 皿井萬三郎

千時文化六巳年水無月下旬寫之。

病神不出と臆 愛は速に戦ふべしと呼はりしかども、誰有て討留めんと思ふ者もなく、三時計仁王立にぞ立ちはだかり待ちけれども敵は更に出合はざりしが、しくも出でられし者か、先づ切らんとす。松なげ捨て、首すぢ引つかみ、三間計と見えし程投げられて落ちたる處をなげ捨てし松の木にてエイと一うち打たりしが目玉飛出て死たりけり。利介も今は是迄とや思ひけん、蓮花寺に行て自害しにけり(落)

※ろ、後代の武士此意を忘れず、忿心を退け我意を捨て、臣としては忠より外に本意なきを常に忘れ給ふなよ。此實録を記し、も忠不忠の行末をしらしめ、いらざる組つひえながらいさゝか爰にあらはず(落)

# 天神山記終

天神山記

一五